

自立心を育てる授業

—授業の組み立て方を中心に—

杉本孝子

1. はじめに

コンピュータは個別学習に適していると言われていたが、実際に授業を見学してみると、一斉授業との相違に驚くことが多い。特に長い間、一斉授業に慣れてしまうと、ひとりひとりの学習進度や内容が異なる方法には戸惑いを覚えるかもしれない。教える方も教わる方も頭の切り替えが必要であり、型どおりの方法では効果は期待できない。やはり、担当クラスそれぞれにあった授業内容や指導法が要求される。

本年度担当の「口語英語Ⅱ」は2年次選択科目であるが、授業前半はLLの一斉授業、後半はコンピュータの個別学習という組み合わせである。前半45分をLL教室で勉強した後、コンピュータ教室へ移動するのであるが、それぞれの授業形式のよさを引き出すように授業を組み立て、なおかつ、両者を分離しないで融合させるような形にした。そして、この授業では、「学生の自立心を育てる」という目的を最も大切にするようにした。それは学生の卒業後の継続学習を視野に入れた場合、必須の条件であるように思われたからである。

しかしながら、学生を見ていると、「自分から学ぶ」という積極的な姿勢よりは「教えてもらおう」という受身の姿勢が目立ち、当初からこうした点の切り替えが必要に思われた。そこで、授業では教科書は使わずに、というよりは学生自身が教科書に匹敵するものを作り、完成した頃にはすべて身につけているようにしようと呼びかけてみた。そして学生がテープライブラリーやコンピュータを利用しながら学べる方法を工夫し、授業をスタートさせた。

本論文では、このように学生の自立心を育てるために、LLやコンピュータを使ってどのように授業をしたかについて、授業の組み立て方を中心にまとめた。授業は半期終了科目であるが、4月開始の前期授業と9月開始の後期授業でそれぞれ異なる内容を扱ったので、両者を紹介することにした。

2. 授業の組み立て方

2.1. 授業目的

授業全般は「学生の自立心を育てる」という目的に沿って構成されている。つまり、教授法や教材の種類、使用する機器や利用方法、提出課題の内容など、この目的を中心にまとめられたものである。従って、授業の組み立て方は、はじめに目的に合った枠組みを作り、次にそれにふさわしい内容を盛り、最後に担当クラスのレベルをみながら調整することになる。ここでは、さらにその上でLLやコンピュータを使ってリスニングやスピーキング力を伸ばすことが求められる。

2.2. 授業計画

この授業は半期終了型で、4月開講の前期授業と9月開講の後期授業がある。半期ごとの予定はおおよそ次のようである。なお、前期、後期とも毎回の授業は前半がLL、後半がコンピュータ利用である。LLでリスニングとスピーキング力を養いながら、それをコンピュータによって「会話集」⁽¹⁾や「表現集」⁽²⁾のように実際に形にするという点は同じである。今回は新しい試みとして、「英単語帳」⁽³⁾プログラムのように、コンピュータで直接に語彙力を伸ばす方法を取り入れた。

(1) 〈前期予定表〉

4月	映画を使ったLL授業に慣れる。Word 98とExcel 2000の基本を理解する。
5月	映画の SCRIPT を見て、すらすら発音できるようにする。Word 98で「会話集」の英文と日本語がすばやく入力できるようにする。
6月	映画の主な会話を聞き取れるようにする。「英単語帳」プログラムで単語帳の2ページ分（1ページ50単語として合計100単語を入力したもの）を正確に作る。
7月	「会話集」を印刷し、本の形にして提出。「英単語帳」のテストで85%以上を2回出し、その単語リストを印刷して提出。前期試験。

(2) 〈後期予定表〉

9月	映画を使ったLL授業に慣れる。ファイルメーカーPro3.0の基本を理解する。
10月	LLでリスニング力をつけながら、映画の中の日常生活に役立つ表現を聞けるようにする。検索エンジンの使い方を学び、インターネットから映画のSCRIPTの出し方を覚える。

11月	LLでスピーキング力をつけながら、「表現集」にまとめた英語をすらすら言えるようにする。「表現集」の書き込みカードに52の表現を入力する。
12月	「表現集」の英語を聞き取ったり、話したりできるようにする。「表現集」を印刷して、カード集の形にして提出。
1月	後期試験。

2.3. 授業の準備

本年度は、2年生の「口語英語Ⅱ」を2クラス担当している。クラスサイズはそれぞれ17名と21名で、「情報英語コース」の学生が多い。使用機器はLL (Sony LLC-9000 System) とコンピュータ (Power Macintosh 7500/100) である。なお、学生は授業の他にテープライブラリーやコンピュータ自習室を使用することがある。これらの条件にそって、次のような準備をした。

2.3.1. 教材選定

教材選定は、授業目的と密接な関係がある。学生の自立心を養い、卒業後の継続学習につなげるという目的に合わせ、教材は特別なものでなく、身近なディズニー映画にした。前期授業では *The Lion King*、後期授業では *Beauty and the Beast* を使い、どちらもインターネットのスク립トや、映画の字幕などを活用した。ディズニー映画を使う理由は、「発音がはっきりしている」、「日常生活に応用できる表現がある」、「ホームページが充実していて関連情報が豊富である」、「ホームビデオの価格が学生の手の届く範囲である」などである。

2.3.2. LLの準備

LLの課題は前期は「会話集」、後期は「表現集」の作成である。テープライブラリーには自習用として英語と日本語それぞれの字幕付きビデオを備えた。また、LLの教卓で使う教材は映画のビデオとその音声テープを用意し、課題ごとに次のようにした。

(1) 「会話集」について

ビデオを見ながら「会話集」にふさわしい英語表現を選んだ後、コンピュータで英語字幕を出し、その該当箇所を音声で点検して訂正を入れた。字幕は映画の限られたスペースで調整されているので、音声と一致しない箇所もあり、確認が必要である。こうして、「会話集」用の音声と英文をまとめた。

(2) 「表現集」について

映画の英語字幕をコンピュータで出して印刷した後、英語音声聞いて点検した。なお、インターネットからスク립トを出して再点検し、正しいスク립トを用意した。

2.3.3. コンピュータの準備

今回の授業ではコンピュータ関係の準備に一ヶ月前から取り組んだが、それでも十分とはいえなかった。ホームページ作りは初めてだったので、マニュアルを片手に試行錯誤を繰り返し、ぎりぎりまで間にあったというのが実情である。なお、コンピュータで行う作業はすべて動作確認をしたつもりであったが、授業が始まってみると予期せぬトラブルに遭遇した。これは動作確認が通常の教室環境でないところで、つまり、教卓で一台のコンピュータで行われたことに原因がありそうである。結局、予想外のトラブルはその場で対応するしかないが、円滑な授業運びのためには、こうした予防策は必要であろう。さて、次はその内容についてである。

(1) 学生に配布するプリントの作成

「会話集」、「表現集」、「英単語帳」の「使用手引き」を作った。これらはホームページで見ることができるとは、コンピュータの作業中は手元にプリントがあると便利なのでクラス分を印刷した。

(2) 「会話集」「表現集」「英単語帳」の見本作り

新しい課題に取り組む時は、実物の見本を見せるとわかりやすい。教材提示装置で映す見本を一部ずつ作った。

(3) 「英単語帳」プログラムの作成

映画はもともとが娯楽用であるため、教材のようにレベル別に語彙数が調節されているわけではない。そのため、知らない単語が続出すると、映像だけでは意味がつかみきれなくなる可能性がある。映画を教材にする場合は、この点をあらかじめ考えておかねばならない。一般に映画は語彙数が多いので、短期間に効率よく覚えられる方法が必要であるが、かといって学生に強制的に覚えさせるのでは、「自立心を養う」という主旨からそれてしまう。

そこで、従来の単語の覚え方の発想を変え、「英単語帳」という専用のコンピュータプログラムを作ってみた。これは、学生それぞれが自分のわからない単語を入力して単語帳を作り、さらにテストで学習定着度を点検できるというものである。「英単語帳」プログラムは1ページに50単語が入り、これが何ページでも作れるので、印刷すれば自分の単語帳になる。Macintosh用とWindows用を作り、教卓の教材用「Lecture」のボリュームに保存した。学生はこれをメールで送ったり、フロッピーディスクにコピーして自宅に持ち帰ることができる。

(4) ホームページの公開

ホームページは当初は卒業生の英語学習支援のためにと考えていたが、在校生にも役に立つと思われたので、両者にわかりやすく作ってみた。特に現在の授業を紹介するページは、

授業目的や内容、全体の授業の流れや毎回の授業展開、課題の作成方法や手順など、具体的に説明した。

2.4. 学生への接し方

今回の授業では「自立心を育てる」ということを大切にしたので、学生への接し方について、次のような点に配慮した。

- (1) 学生に何をどういう手順で学ぶのかわかりやすく、具体的に伝える。
- (2) 「～しなさい」というような命令的な指示は避ける。かわりに、学び方のヒントをいくつか用意し、授業中にタイミングよく知らせる。
- (3) 課題の評価基準を明らかにし、落ちついて積極的に取り組めるようにする。
- (4) 学生が授業の中で困った時に孤立させないための工夫をする。

上記(1)は、学生は何をどうするかをはっきりと理解し、一旦、自分のペースで消化し始めると自発的に動くきっかけをつかむことが多いので、努めて明確な説明をするようにした。(2)は教師の指示がなくても学生が先へ進めるように、選択可能な複数の学習ヒントを提供した。LL やコンピュータを使うので、通常のプリントに加え、ビデオの英語と日本語字幕の利用方法、ホームページやインターネットの活用方法などを説明した。(3)は、課題に対する正当な評価を知らせることによって、やりがいを引き出そうとした。(4)は、英語の聞き取りやコンピュータ操作など、困った時のためにクラス全員をふたりの組にして助け合えるようにした。特にコンピュータ教室では隣りに座らせてトラブルの解決に協力できるようにした。それでもわからない時は、教員やメディアセンターのスタッフが対応できるようにした。

2.5. 毎回の授業展開と授業の実際

2.5.1. 毎回の授業展開

毎回の授業は大きな枠組みの中で教え方や進度を調節し、全体に少しずつレベルアップしていくような段階的指導を行った。例えば、LL では、映画のスク립トを音声テープに合わせて読むような初歩的な練習に始まり、シャドウイングや同時通訳風のペアワークなど、かなり高度な練習へと発展する。コンピュータも英文入力の基本操作から入り、最後は「会話集」作成のように全体のレイアウトを整えて表紙デザインまで進む。次の表は授業展開をおおまかに説明したものである。

<授業展開表>

時間	授業内容	LL, コンピュータの使い方	目的
5	出欠席の確認	アテンダンスで出席確認	授業への準備

	当日の授業内容の明示		
15	小テスト（発音練習）と採点 小テストの弱点補強練習	モニターして採点する インカムで直接に指導する	学習定着度をみる 弱点のアドバイス
10	映画を見せて、同時に録音	学生テープに強制録音する	英語を聞かせる
10	日本語を聞かせて、同時に録音	学生テープに強制録音する	内容を理解させる
5	来週の小テストの説明	LLで実演して示す	練習で力を伸ばす
5	教室の移動（LLからPC教室へ）		
10	コンピュータ操作の主な説明	Word 98や「英単語帳」プログラムの使い方をモニターで説明する	新しい使い方を教える
25	課題制作	ホームページやインターネットを利用する	自分で学ばせる
5	今日のまとめ	モニターで具体的に説明する	次回授業への準備

この表からわかるように、授業の時間配分はLLとコンピュータで45分ずつである。また、LLの一斉授業とコンピュータの個別授業がセットになって、毎回、循環するような形で展開している。その他、英語のビデオを見せた後に日本語音声聞かせるなど、教え方もいくつか特徴がある。以下はその主なものである。

(1) 課題に取り組みながら力をつけ、その成果を形にする

この授業では教科書はないかわりに、学生が自分で教科書に相当するものを作ることになっている。「会話集」や「英単語帳」がそうであるが、単にやるだけでなく、実際に力をつけることが求められるので、課題の量は多い。このように授業目的は課題の量や質、及びその評価と密接に結びついている。

(2) LLとコンピュータの循環型授業で効果をあげる

一斉授業と個別学習にはそれぞれの良さがある。比較的短い期間にクラス全員を一定のレベルまで引き上げたい時や、必要な学習内容を全員に教えたい時などはLLの一斉授業が効果的である。また、学生にある程度の力がついてきて、自分でどんどん先へ行ける時はコンピュータが便利である。今回はその両方の良さを取り入れて授業を循環させている。そして、LLで力をつけた分をコンピュータで形に表すことによって、さらに学習意欲を刺激するという方向で進めている。

(3) 日本語音声を利用して意味をつかむ

映画はナチュラルスピードの音声有大量に流れるので、スクリプトの量も多い。毎回7分程度を見せたとしても、A4用紙で3枚ぐらいになりそうである。従って、耳で聞いた内容をスクリプトで確認しようとする、英文を読む作業にかなりの時間がかかる。しかも従来の訳読法に慣れた学生は逐語訳から抜けきれず、意味を理解するよりは、和訳することに気を取られてしまう傾向がある。

そこで、今回は英語のビデオを見せた後に、その日本語の音声テープを聞かせ、同時に学生テープに録音させるようにした。そしてそれを繰り返し聞かせ、内容を耳で確認させるようにした。こうすれば、音声を聞くだけなのであまり時間がかからないし、話題のポイントもつかみやすい。また、重要な場面の英語は記憶に残りやすいので、その音声をもとに発話練習につなげることもできる。

(4) 学習ヒントで柔軟に対応する

授業は全員が同じ歩調で進めるというものではなく、実際は学生の個人差によって学習進度にばらつきが出やすいものである。その他、2年生は就職活動や教育実習などで欠席せざるをえない場合もあり、こういう事態に柔軟に対応できる授業形式も考えてみる価値がありそうである。この授業では、テープライブラリーで映画を見たり、プリントやホームページを見ながら課題に取り組むなど、いろいろな自習形式を選択できるようにした。

2.5.2. 授業の実際－7月5日の授業例より

では、実際に7月5日の授業を見てみることにする。7月は後半に前期試験をひかえているので、5日から12日までを「会話集」の課題提出期間とし、12日を「英単語帳」テスト(85%以上の点数を2回出し、その単語リストを提出)の最終日とした。すでに当日、「会話集」と「英単語帳」の課題を提出した学生もおり、授業は終盤に入ったところである。この日は課題の提出の締め切りに間に合わせようと、学生は真剣にキーをたたいていたようであった。全体に、LLもコンピュータも何をどのようにするかという要領はわかっているので、忙しい中にも落ち着いて取り組むようすが見られた。なお、当日のLLは次のような発音練習である。

- (1) <小テスト> 前日に予告した「会話集」の英語を音声テープに合わせてひとりで読ませる。教員はそれをモニターし、必要ならばインカムで助言する。
- (2) <発展練習> 「会話集」の英語音声に合わせて、ペアワークで読ませる。教員はモニターして聞き、問題個所をインカムで助言する。
- (3) <発展練習> 「会話集」の英語音声のみを聞きながら、ペアワークで日本語で言わせる。教員はモニターして聞き、問題個所をメモする。

以上がその内容であるが、次の授業では、さらにシャドウイング（英語音声聞きながら英語で追いかける練習）に進んだ。発音練習も英文を読むように文字のあるものは易しいが、文字がなく音声のみで行うものは難易度が高い。上記（3）の練習はLLのヘッドセットから聞こえてくる音声を、ペアの相手と役割分担しながら日本語に直していくのであるが、音声は流れっぱなしなので、少しでも聞き逃すとすぐについていけなくなる。当日は（1）と（2）の練習がかなり消化できたので（3）に進んだが、このように次の発展練習に進むタイミングは、普段のモニターが効果的に機能している。

3. 学生の反応

この授業は教科書がないので、授業に出ないで後からまとめてやろうとしても融通がきかない。LLの小テストも発音が主なので、練習なしでは口が思うように動かない。ましてや、ひとり一台のコンピュータとなれば、やるべきことをやってこなければ、入力するものがなくて困ってしまう。慌てて授業中にやろうとしても効率が悪く、みんなから遅れていくのがわかる。

しかしながら、自分から積極的に授業を消化していけば、リスニング力がつき、LLのスピーキング練習も楽しく参加できるようになる。予習した分だけコンピュータに入力できるので、やったことが目に見える形になる。友達と相談しながらわからない点を解決し、コンピュータに強くなっていくのがわかる。というように、周囲とコミュニケーションを取りながら自分のペースで先へ進めるおもしろさを味わうことができる。

さて、課題についてであるが、前期授業は「会話集」の完成と単語テストである。単語テストはコンピュータ上で「英単語帳」プログラムを使い、85%以上のスコアを2回出すことを課した。単語テストは1回分が50単語なので、その85%以上となると、少なくとも42単語は正確に書けないと合格しない。

この課題の結果を見てみると、「会話集」は担当した2クラスの計38名中のうち35名が提出したので、約92%はできたことになる。単語テストは、2回とも合格した学生は2クラス合計38名中28名で全体の74%に達し、1回のみ合格は38名中8名で21%、また0回（欠席などでテストを受けない場合）は2名で5%の結果であった。これらの課題は量が多くレベルも高いので、課題が提出できれば、ある程度Word 98が使いこなせるようになり、表計算ソフトのExcel 2000の基本が理解できたとみなすことができる。特に学生はWord 98による入力が速くなったとわかるのか、自信を持ったようである。その他、「会話集」で目についたのは、表紙デザインを自分から工夫して、きれいに仕上げていくようすであった。これは教師のほうも、見ていて楽しかった。なお、後期授業は今現在、始まったばかりである

が、インターネットや映画字幕を使って自分から学ぼうとしている姿も見え始めている。

なお、学生をふたりずつの組にしたことについては、効果があったように思われる。友達づきあいのルールを守り、質問は相手の様子をみながらしていたし、クラス全体のペースから遅れ気味になった時などは励ましあう声も聞かれた。

その他、今回のCALLラボ型授業については興味深いことがあった。それは通常の授業では目立たないような学生が着実に授業をこなし、コンピュータに強くなりながら英語力をつけていったということである。これは教師にとっては嬉しい発見である。大抵はおとなしそうな学生に多いのであるが、その表情が明るくなっていくのが印象的であった。

考えてみれば、一般にLLではみんなでビデオを見て授業をするので、一部に個別学習を取り入れるとしても、全体としては一斉授業の流れになりやすい。そうすると一度にそろって発音することが多く、すばやく反応できる学生が目立ち、消極的な学生はなかなか出番がまわってこない。ところが、この授業はLLの一斉授業とコンピュータの個別学習でありながら、全体を取り囲むようにいろいろな学習ヒントが配置されており、ホームページやインターネットで自分の欲しい情報を選ぶことができる。そして、困ったことがあれば友達と相談したり、その場で教員に聞くこともできる。ということは、全員一緒にの波に乗らなくても、後から自分のペースでついていけばいいのである。ゆっくりでも確実な一步を踏み出すことが大切で、それが形になって次の一步を後押しする。

クラスを見渡してみれば、みながみな活発で積極的とは限らない。潜在的な力はあっても、おとなしい性格のために目立たない学生もあろう。そうした学生にとって、みんなと一緒にやらねばならないということは、精神的なプレッシャーなのかもしれない。個別授業の枠と自由に選べる学習ヒントがプレッシャーをはねのける一助となるのであれば、それはまた価値のあることのように思われる。

4. 今後の課題—よりよい授業のために

この授業内容はCALLラボ授業に等しいと考えることができる。今現在はCALLラボ教室がないのでLLとコンピュータを別々に使っているが、実質的には同じ内容を提供している。さて、そのCALLラボであるが、最近ではLLとコンピュータの使い勝手が格段によくなり、インターネットのできる環境が一般的になりつつある。だが、同時に重装備の教室ならではの問題も抱えている。

つまり、現実には担当教員がLLとコンピュータを操作せねばならず、その負担は軽くない。学生にしてもコンピュータがある程度できることが参加条件である。しかも、英語の授業となれば、学生の英語力が伸びなければ意味がない。「英語」とも「情報機器演習」と

もわからぬような中途半端な授業は失敗なのである。どちらかと言えば、一筋縄ではいかないほうであるが、成功すれば、密度の高い授業を提供することができる。

さて、以上の点も含め、これまでの授業の中から今後の授業に役立つ点をまとめてみた。

4.1. コンピュータの授業サポートの必要性

この授業は、LL 教室で録音したテープを自宅でノートに書き取ったり、休み時間にコンピュータで英文を入力したりするなど、授業外の学習が多い。授業中は授業でしかできないことを優先したので、その分の自習時間が増えたのであるが、一方では量を与えて力をつけようとした意図もある。この場合、聞き取りはひとりでもできるが、コンピュータのトラブルに関しては、専門スタッフのサポートが必要である。また、短期間で習熟度を高めようとするれば、授業外のサポートは、なおさら欠かすことができない。

実際に、4月初めに Word 98を使って「会話集」に取り組み始めた頃は、学生はキーをたたくのも遅く、その機能を使いこなすどころではなかった。Word 98を初めて使う学生もいたが、既に習った学生でさえ、初めからやり直すという状態であった。この時はメディアセンターに応援を求めたが、おかげで5月前半には全員ができるようになり、授業を軌道に乗せることができた。

4.2. 自宅学習の促進

教室のコンピュータは Macintosh であるが、最近では Windows が広く普及し、自宅にコンピュータがある学生の場合もほとんどがこれに該当している。そのため、自宅でやりたいという学生や、就職活動などで学校では十分な時間が取れないという学生のために、Windows のノートパソコンをモニタに接続して簡単な説明を加えた。決して十分な時間ではなかったが、自宅のコンピュータを使い始める学生も出てきたので、こうした配慮は必要に思われた。

4.3. 授業専用コンピュータプログラムの改良と普及

この授業では、語彙力を効率よく伸ばすための「英単語帳」というコンピュータプログラムを作った。その後で何回も動作確認をしたにもかかわらず、実際に授業で使ってみると思わぬエラーに当惑させられた。しかし、そのうちにエラーが出つくしてタイプ別に整理できるようになり、大体のポイントは把握することができた。今後はこれをもとに教員とコンピュータ関係のスタッフが改良すれば、使い勝手の良いものに仕上げることができる。

なお後期授業の「表現集」は、ファイルメーカープロ3.0で作った書き込み型カードであるが、これなども応用範囲が広い。他のクラスでできたプログラムも含め、改良したプログラムを普及させる道筋も考えられるべきではないかと思う。

4.4. 授業でのホームページの活用

最近は授業用ホームページをよく見かけるようになった。私の授業でもホームページを使っているが、授業の方針や課題作成方法など、具体的な情報を提供している。

例えば、映画の中の会話をまとめた「会話集」の作り方、語彙力強化用「英単語帳」プログラムの使い方、カード型「表現集」の作り方など、手順を分かりやすく図解入りで説明している。一般的なコンピュータのヘルプ機能は専門用語が多くて初心者にはわかりにくいので、専門用語はなるべく使わずに解説してみた。教育実習や就職活動などで授業に出られない学生も利用できるのも便利である。

なお、私のホームページは自宅から更新するために、個人で契約しているプロバイダーを使っているが、大学にFTPが設置されるようになれば、授業用ホームページはさらに普及するのではないかとと思われる。

5. ホームページによる卒業後の英語学習支援

学生が卒業する頃にはLLは中級レベルに達しているが、実際に使える英語力としては上級レベルがのぞましい。できるならばさらに学び続け、より高い英語運用能力を目指してもらいたい。そこで、そのための試みとしてホームページによる学習支援を取り上げ、授業紹介のページを作り、そこから卒業後の学習を再開してもらおうと考えた。もちろんホームページを過信するのは禁物であるが、自分から学びたいという学生を応援することはできよう。しかも授業ではテレビ、ラジオ、インターネットなど身近なメディアを活用した学習方法を教えてきたので、卒業後の継続学習は不可能ではあるまい。今後は、ネットの双方向性を生かし、お互いにやり取りしながら有用な情報を共有していきたいと考えている。

さて、そのトップページ (<http://www6.ocn.ne.jp/~takako34/>) には、「卒業生のあなたのために」という言葉を添え、黄色のコスモスをあしらってみた。いつだったか、近くの公園でめずらしい花を見かけ、おもわずシャッターをきったものである。風に揺れるコスモスの群れの、そのさわやかな美しさに学生の将来を託し、次のようなメッセージを送った。

—教室からあなたへ—

東洋女子短期大学の卒業生のみなさん、お元気ですか？ 時々、卒業した方から英語の勉強について質問をうけることがあります。そんな時はとても嬉しい気持ちになります。卒業してから、特に仕事をしながら勉強することは大変なことですが、それでもがんばっている人がいるかと思うと、こちらも励まされるように感じます。

そこで、このホームページではそうした人たちのためにテレビや、ラジオ、インターネットなどを使った身近な勉強方法を紹介していきたいと思います。また、今、どんな授業をしているか見てみたいという人には、私のクラスの授業を紹介します。

卒業後、あちこちに散らばったみなさんが、このホームページを通じて、かつての学生時代のように共に学び合うことができれば、どんなに素晴らしいことでしょう。また、在学生のみなさんもこのホームページでいろいろな勉強方法を身につけてください。きっとあなたのためになると思います。

6. まとめ

授業を終えて思うことは、LL やコンピュータを使う授業は、チームワークが非常に重要だということである。実際にこの授業はLL とメディアセンターの協力を得て、レベルを高く維持しながら学生が意欲的に取り組めるようにできている。これは私という教師ひとりでできることではなく、授業を支えるスタッフの専門知識とセンスが反映されているからであろう。

私はこれまでLL に専念してきたせいも、CALL ラボ授業にしてもLL の音声言語教育が主軸である。特にLL 教育では、この大学の完成された教育授業支援システムの恩恵を受け、あるいはまた、スタッフの技術力の高さに刺激されて、思いのかぎり仕事をする事ができた。テープライブラリーの利用など、授業外のサポートにしても、私の授業を理解した上での適切な対応であった。おかげでいつも安心して新しい授業にチャレンジすることができた。学生もスタッフの暖かい応援を受けて、積極的に授業に取り組めたのではないかと思う。今後は、学生がここで身につけた力をさらに伸ばし、将来に生かしてくれればと願う。

注

(1) 会話集は Word 98 を使って、映画の中の会話に役立つ表現を英語と日本語でまとめ、表紙をつけて本にしたものである。本の 1 ページには次のように英語と日本語でおおよそ 7 つの表現が入る。詳しくはホームページを参照。URL (<http://www6.ocn.ne.jp/~takako34>)

- | |
|---|
| <p>1. Mufasa: Drop him.
Zazu: Impeccable timing, your majesty.</p> <p>2. Mufasa: Sarabi and I didn't see you at the presentation of Simba.
Scar: That was today? Oh, I feel simply awful.</p> |
|---|

- | |
|--|
| <p>1. ムファサ: はなせ。
ザズー: なんといいタイミング。</p> <p>2. ムファサ: おまえは私の息子の儀式に出なかったぞ。
サラビ: それは今日の事だったのか。申し訳ない。</p> |
|--|

- (2) 表現集はファイルメーカーPro3.0を使って、映画の中の「日常生活で使える表現」をまとめ、カードにしたものである。教員の教材が入っている「Lecture」のボリュームには、次のような書き込みカードが保存されている。学生はここから「表現集」ファイルを自分のボリュームにコピーして使う。以下はその入力画面である。詳しくはホームページを参照。URL (<http://www6.ocn.ne.jp/~takako34>)

< 1枚目のカード。表現を種類別に選択する >

表現集

用語集

レコード数: 1

未ソート

新規作成 削除

NO 1

●表現の種類

★登場人物

あいさつ
言い訳をする
怒る
謝る
依頼する

英語

日本語

< 登場人物名を選択すると、次のようなカードができる >

表現集

用語集

レコード数: 1

未ソート

新規作成 削除

NO 1

●表現の種類 命令

★登場人物 Belle

英語 Don't talk about my father that way.

日本語 お父さんのことをそんなふうには言わないでください。

<印刷すると A 4 サイズ用紙に 4 枚のカードが入るようにレイアウトされている。これを縦横に 4 枚に切り離し、カードを作る>

<p>新規作成 削除</p> <p>NO 1</p> <p>◆表現の種類 命令</p> <p>☆登場人物 Bob</p> <p>英語 Don't talk about my father too early.</p> <p>日本語 お父さんのことをそんなに早くに言わないでちょうだい。</p>	<p>新規作成 削除</p> <p>NO 2</p> <p>◆表現の種類 言い訳します</p> <p>☆登場人物 Fum</p> <p>英語 But I've lost my keys this way.</p> <p>日本語 でも、道をなくしたんで、今戻らるところがいます。</p>
<p>新規作成 削除</p> <p>NO 3</p> <p>◆表現の種類 命令</p> <p>☆登場人物 Le Fou</p> <p>英語 Come, warm yourself by the window.</p> <p>日本語 さあ、火のそばで暖まりなさい。</p>	<p>新規作成 削除</p> <p>NO 4</p> <p>◆表現の種類 命令</p> <p>☆登場人物 Cogsworth</p> <p>英語 [demand that you stop right there.</p> <p>日本語 そこですや止まるように。</p>

- (3) 「英単語帳」はメティアセンターと協力して作った語彙力強化用コンピュータプログラムである。単語を覚えるだけでなく、定着度を測るテストもできる。なお、単語リストを印刷すれば、実際に単語帳を作ることができる。詳しくはホームページ参照。URL (<http://www6.ocn.ne.jp/~takako34>)

<単語入力画面。このダイアログボックスに英単語とその日本語を入力する>

1/1

検索 削除

No 1

英語 新規カード

日本語 更新

備考 保存

終了

<50単語の入力が終わると単語リストができる>

A		B		C		D	
Topへ		結果シートへ		入力フォーム			
テストへ		メモ帳へ					
英語		日本語		備考			
1	twitter	さえずる					
2	insect	昆虫					
3	chirp	ちっちと鳴く					
4	planet	惑星					
5	blink	まばたく					
6	despair	失望					
7	faith	信じること					
8	squeek	金切り声をあげる					
9	sniff	くんくんかく					
10	squeal	キーキー鳴く					

<単語テストをすると正解率が即座に出る>

英単語帳					
	A	B	C	D	E
1	Topへ				
2	単語入力画面へ				
3	テストへ				
4	メモ帳へ				
5					問題数
6					1
7					正解個数
8					1
9					正解率
10					100.0%
11					
12					
13					
14	不正解リスト				
15		No	誤答	正答	
16					
17					

参考文献

- Baily, Kathleen M. and David Nunan. *Voices from the Language Classroom*.
Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Freeman, Donald and Jack. C. Richards. *Teacher Learning in Language Teaching*.
Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Lynch, Brina K. *Language Program Evaluation*.
Cambridge: Cambridge UP, 1996.
- Schmitt, Norbert. *Vocabulary in Language Teaching*. Cambridge: Cambridge UP, 2000.

Rivers, W. M. *Teaching Foreign—Language Skills*. Chicago: U of Chicago P, 1987.